

《第 529 回(2025 年 11 月 13 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:11 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『虹の少年たち』 アンドレア・ヒラタ／著, 加藤 ひろあき／訳, 福武 慎太郎／訳

Sophia University Press 上智大学出版, ぎょうせい(発売)

11月は世界の本の読書会を開催しました。インドネシアの小説『虹の少年たち』を課題図書に、高知市国際交流員のファジャルさん(インドネシア出身)をゲストにお招きました。課題図書は、生徒が10人そろわないと廃校になってしまう小学校に通う貧しい子どもたちの成長を生き生きと描いた、著者の自伝的小説です。ファジャルさんから、インドネシアの教育事情や、小説の舞台となったブリトゥン島の様子なども聞くことができました。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●最初は読みづらかったが、クラスがまとまってきたあたりから読み進めることができた。それぞれの初恋のエピソードが魅力的だった。インドネシア版の『二十四の瞳』(壺井 栄)。登場人物が生き生きしていて、個性的。続編も読んでみたい。

●希望という言葉がぴったりの本。インドネシアの貧富の差、スズ産業の社会的問題も感じた。リントンのお父さんが、4×4 を14と覚えていたところが、14 はお父さんが養う家族の人数で、伏線になっていたのかと思うと切なかった。

●三部作の一作目で続きが気になる。貧しい子どもたちにとって学校へ行くことは特別なこと。日本は恵まれている。勉強したい子ができないことは悲しい。子どもたちは学校を楽しんでいるが、衛生面などを考えるとある程度の環境整備も必要では。

●インドネシアの物語を読むのは初めてで、地図でブリトゥン島を探した。10人集まないと始められない学校は義務教育ではないのか。競技会のあとで、イカルが自分の夢を言うことができてよかった。映画も観てみたいと思った。

●タイトルがこの本を集約している。カーニバルでは子どもたちを虹のように塗り、学力競技会では、光学=虹について議論をする。学びの大切さを感じた。イカルの初恋は、時代や宗教が違って同じだなと感じた。

●幸せに終わるかと思っていたのに、イカルもリントンも学べていない。三部作の最後では、みんなが幸せになれると信じたい。リントンは天才。そんな人材を国は放っておいていいのか。この学校はすばらしい。ブリトゥン島にも行ってみたい。

●人間は希望を持って生き、共生するもの。自分の近くにも同じような問題があるのではないかと思った。幸せとは何か。今いる一人一人が抱えている問題。ハルファン校長の「最大限受け取るのではなく、最大限与えるように生きなさい」は他人ごとではない。

●ハルファン校長もムス先生も子どもたちの才能を信じていて素晴らしい。貧しいことは子どもたちの才能には関係ないが、生活には影響を与える。サハラ「評価や教育、功績は夢を見る勇気のある子に送られるべき」という言葉がよかった。

●40kmを自転車で通うリントンの学びたいという思いに圧倒された。個性的な子どもたちがたくましく成長していく姿は、今の日本の子どもたちとの違いを感じた。12年後の現実が思い描いたものとは違っていても、自分の道を歩いていてうれしかった。

●前向きになれる本。映画がヒットしたときに、主題歌もヒットした。今もミュージックビデオを YouTube で観ることができ、コメントも書かれ続けている。前向きになれる歌。

●インドネシアでは、勉強だけが貧困から抜け出すためのチケット。先生は「勲章のない英雄」と言われている。お金も地位も上がらない。自分は中学生のときにこの本を読んで夢を持ちたいと思った。教育の機会均等はあるが、ジャワ島に集中し過ぎており、リントンのような子どもは今もいる。

次回 12 月 11 日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『ひと粒のチョコレートに』 佐藤 清隆／文, junaida／絵 福音館書店

※申込み・参加費は不要です。